



三 盆踊りの始まり

「どうじゃ。少しは役に立ったかいな」

「あ。、だけど、まだ、もう一押しが必要じゃな」

「わかってる。それには、わし一人だけでは難しい」

「もちろん。みんな協力するわ」

「ここだけでなく、他の地域もなんとかしたいなあ」

「夢は膨らむなあ」

「目指せ、全国ネットじゃ」

「ネット言うたら、頭にかぶるやつか」

「それは、シャンプーハットじゃ」

「確かに、寒くなったらあったかいコーヒーがええなあ」

「それは、ホットコーヒーじゃ。ぼけたらいかんで」

「冗談じゃ。何でもやるんはええけど、ユーモアがないとな」

「そりゃそうや。一生懸命は、必ずしもええことやないで」

「本人はかっこええと思うとるかもわからんけど、ひきつった顔はみっともないだけじゃ」

「あいつらにもユーモアをかましてやろか」

「でも、ユーモアと受け取ってくれるかいな。ちょっと厳しいんとちゃうか」

「なあに。あいつらにはこれくらいやらんと目が覚めんで」

「いわゆる、ブラックジョークかいな」

「そうやなあ。ブラックというよりも、土の匂いや」

「今の若い子たちにも土の臭いを感じて欲しいなあ」

「そうや。人間は、土から生まれてくる大根や人参を食べて大きくなるんや」

「ほな、人は土から生まれてくると言ってもええんかいな」

「そりゃ、そうや。ほなけど、埋まっとんやないで」

「それは、あんたや」

これだけの人数か。中垣は啞然としてため息をついた。また、空を見た。快晴だ。夕日が赤い。シチュエーションは最高だ。だが、集まったのは、昔から住んでいる人を中心に、新興住宅、ニュータウンから十数人。本当は、百人単位の参加者を期待していたのだが。

また、集まってくれた人たちは、ほとんどが高齢者で、腰が痛かったり、足が不自由で、まともに踊ることは難しいように思える。と、なると観客要員か。だから、実際に踊れるのは十人程度だ。

それでは、少し寂しすぎる。そのため、中垣たちスタッフも、運営をしながら踊りに参加しなくてはいけない。当初、やぐらを中心に、二重、三重の輪踊りを考えていたが、それは難しい。輪を小さくするしかない。その反面、踊る人同士の間を少し空けて、いかにも多くの人が踊っているように見せないと、かっこうがつかない。運営は大変だ。

「すみません。あれこれと手を尽くしたのですけれど」

木本事務局長が自治会長に頭を下げた。

「そんなことないですよ。事務局長は、地域に住んでいる全戸を訪問したり、都会に住む元住民やその子どもたちにも盆踊りのチラシを送付したんですよ。「残念ですけど、所用のため、参加できません」と丁寧な礼状を送ってくれた人もいたけれど、ほとんどの人が無視なのか、拒否なのか、何の返事也没有ませんでした」

中垣は顎を胸につけるぐらいにガクっと首を垂れた。

「ああ。わかっているよ。木本さんの頑張りには礼を言いたいよ。そして、中垣君にも」

自治会長も頭を下げる。

「いやあ。よしてくださいよ。私もこの地域で生まれ育ったものです。この地域が元気になるために、やったことだけですよ。それよりも、まずは、折角、集まってくれた人たちのためにも、この盆踊りを楽しくやりとげましょう」

木本さんが満面の笑みを浮かべる。彼の目は既にやぐらを見つめている。

「そうですよ。みんなが楽しくやっていたら、盆踊りの音楽に誘われて、多くの人が集まってきますよ」

中垣も自分を鼓舞するかのようにあえて声を大にする。この声も町中に聞こえてくれたらいいと思う。頭の中には、昔話の、こぶとりじいさんが鬼の笛の音や太鼓の音に誘われて、木の穴から出て、踊りだす姿が浮かんでいた。

「そんなに、うまくはいかないけれど、確かに、来てくれた人には楽しんでもらわないといけない」

自治会長も満足そうな顔だ。

「それに、秘密兵器があるんですよ」

中垣が木本さんの顔を見つめる。

「秘密兵器？」

自治会長が、ほお、というような顔をした。

「秘密兵器と言うと大げさですが、今日も来てくれている山下さんがアイデアを出してくれたんですよ」

参加者が集まったテントの中では、呆けたような顔でやぐらを見つめている山下のおばあさん

がパイプ椅子に座っていた。

「そうか。あの山下さんがアイデアを出してくれたのか」

自治会長も驚いている。そりゃそうだ。中垣だって驚いている。あの盆踊りのアイデアを出してくれたので、当日、山下さんの家に出向き、是非、アイデアを採用したので、山下さんもぜひ盆踊りに来てください、と挨拶に行ったのに、ヒーローとは言えないまでも、功労者のはずの山下さんは、何のことを言っているかのように、首を傾げ、「おまんじゅうもでるんかいな。お茶も出してよ」と、頓珍漢な返事をするだけだった。そう言えば、最初に訪問した際も、同じような態度だったことを思い出した。でも、あのアイデアを出してくれたのは、山下のおばあさんだ。今がどうであれ、その時がどうであれ、アイデアを出した事実は事実だ。

「ええ。そうです。だから、今日もこうして案内したのです」

「それはいい。やはり、地元住民からの声を反映させることが地域の活性化につながると思いますよ。有名人を呼んでくるだけのイベントじゃ、一過性に終わり、次につながりませんからね」

自治会長も大きく頷いた。そのアイデアの創出者である山下さんは、中垣たち話の主人公が自分であるとはわからず「冬やの暑いなあ」と呟きながら、陽だまりで体を丸めて温まる猫のようにじっと座ったままだった。

「若い、縁もゆかりもない奴でも、頑張っているじゃないか」

「そうだな。それに対して、なんじゃ、他のやつらは」

「駄目な奴には何を言っても駄目なんじゃ」

「二、六、二の法則じゃ」

「なんじゃ。その、に一、ろく一、に一の法則とは？」

「集まった人の二割が引っ張って、六割がそれについて行って、残りの二割が無視するんじゃ」

「ほうで。でも、あの集まりを見ると、一、一、八の法則のように見えるけどなあ」

「ちょっと、空回りのところはあるなあ」

「でも、このままではいかんじゃろ」

「そうじゃな。わしらも口だけでなく、なにか、応援してやらんとな」

「そうでないと、わしらも、残りの八のやつらと同じように、見て見ぬ人になってしまうで」

「これまで祀り上げられとって、見られるばかりで、体が少しなまっとるけれど、体を動かしてみるか」

「そうじゃ。そうじゃ。その意気じゃ」

「それなら、最後の手段を仕掛けるか」

「やろう。全国の仲間とは既に話がついているぞ」

「準備万端だな」

「ちいとばかり、きついお灸になるけれどな」

「最近の奴らは、お灸なんて知らんぞ」

「なあに。窮することぐらいなら知つとるやろ」

「それなら、後は、スタートのピストルを撃つだけや」

「もし、万が一、鳴らんかったら？」

「口で、パンと言うだけだ」

「パン」

「こら。それは、フライングやで」

「ありや。今ので、動き出したかもしれんぞ」

「ほらみてみい。まあ、ええがな。ちょっと早まっただけや」

「なんでも早い方がええで」

「答えも早くみたいもんやなあ」

ここは大都会の高層マンションの一室。

「ピンポン」

朝の七時にチャイムが鳴った。もうすぐ出勤の時間だ。

「誰だ、こんな早くから」

正人はテーブルの上に新聞を広げながら、トーストを齧っている。時たま、顔を動かさないまま手を伸ばし、コーヒーカップを掴む

「おい。誰か、来たぞ。聡子。宅急便か何かじゃないか」

自分は体を動かさずに、顎だけ動かして妻の聡子に対応するように促す。

「あなたこそ、出てよ。あたしだって忙しいのよ」

聡子はベランダで洗濯物を干している最中だ。

「俺はもうすぐ出勤するんだ。今は、食事中だ」

「食事中だって、新聞を読んでいるだけじゃないの」

聡子が振り向くと、正人は体勢を変え、新聞を両手で持つと大きく広げて顔を隠している。あくまでもチャイムに対応する気はないことを体全体で対応しているのだ。

「新聞を読むのも仕事だ。サラリーマンは朝、起きたときから、今日一日何をするか、どう行動するか、人と会うのに寝癖がついていないか、口臭はないか、得意先に行った際の、最初の掴みの話題は何をしようか、と気を配っているんだ。戦闘のための準備は家の中から既に始まっている

るんだ。そして、家から一歩出れば戦場なんだ。まだ、準備ができていないうちに、玄関を開けてみろ、一発で即死だ」

体が動かない分、口はよけいに回る。よし。これなら、大丈夫だ。朝一番の打ち合わせでも、積極的な発言ができるぞ、と正人はほくそ笑む。

「もー」

聡子は正人に言い返しても、十倍以上の反論がされて、その割に物事が進展しないことはこれまでの結婚生活で知っているから、短いながらも、ささやかな反抗の意思を示しながら、洗濯物の靴下の片方だけを干し終わると、もう片方は手に持ったまま、正人の横を通り抜け、玄関に向かった。

「どちらさまですか」と聡子の声とドアを開けるガチャンという音が同時にした。その瞬間、キャーという悲鳴とドサっという何かが家に侵入してくる音が同時に聞こえた。

「どうしたんだ。朝っぱらから、大きな声を出して。近所迷惑だろう」

妻の悲鳴を聞いても、正人は新聞を広げたまま、最後の締めくくりとばかりに第一面の下段にあるコラムを読んでいる。打ち合わせの会で、何か、気の利いた一言を言うためだ。それで、正人の株は、前日の東証平均株価の乱高下に関係なく、優良株のように着実に上がっていくのだ。そうして、役職の階段は、給料の階段は、一段ずつ上がっていくのだ。

「あ、あ、あなた。ゾ、ゾ、ゾ……」

妻の言葉にならない言葉が聞こえる。一枚しかない舌が二枚、三枚でもあるかのようにもつれているようだ。

「もう、一体、どうしたんだ。雑巾がどうしたんだ」

コラムを読み終えた正人が広げていた新聞を下した。目の前には服が立っていた。しかし、普通の服ではない。泥が付着している。しかも、さっきまで土の中にいたように、湿り気を帯びている。そんな服を着ている奴は誰だ。勝手に家に入ってきたことよりも、そちらの方が気になった。正人は相手の腹、胸、首とへとゆっくりと視線を上げていく。

「ゾ、ゾ、ゾ……」

正人も一枚しかない舌がもつれたように、言葉にならない言葉を発した。目の前には、人間とは思えないような人間がいた。体中は泥だけでなく、血糊も付き、顔や手足から腐臭を発しながら、常識破りのあらぬ方向に曲がっていた。

そう、目の前の人間は死体だった。その死体が歩いている。繰り返す。雑巾ではない。ゾンビだ。正人は、口から言葉は出ないものの、朝早くから、今日のスケジュールを考え、新聞にも目を通しているせいか、脳は回っている。現状の認識はできた。だが、コラムをいくら読んでいても、現状を的確に表現する言葉は見つからなかった。もちろん、次なる行動も。